

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。



京都大学

学際融合教育研究推進センター 生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

南丹市美山町北
かやぶきの里

朽木フィールドステーション

コオロ焼き

朽木 FS 研究員 島上宗子

コオロギ大発生!

11月11日、雨が降る中、滋賀県余呉町（現・長浜市）の中河内集落で紅カブを収穫しました。昨年同様6~7畝程度を焼き、紅カブ（余呉在来の山カブ、安曇川在来の万木カブ、F1種のあかくらカブ）とその間を区切るように大根の在来種（灰原辛味大根、たたら辛味大根、宮重大根）を播いたのですが、全収穫量は山カブ約20kgのみ。山カブ96.67kg、万木カブ139.99kg、辛味大根5.7kgを収穫した昨年と比べると、とても残念な結果となりました（昨年、今年とも滋賀県立大学・野間直彦氏測定）。



雨の中の収穫と獣害防止柵撤収作業。
左上の区画以外はほぼ壊滅状態(上)

コオロギに負けずに育った山カブ(右)
[写真は上・右とも増田和也氏撮影]

昨年と今年と何が違ったのか。今年は台風の影響で火入れが半月ほど遅れて8月30日となったこと、土地の植生、焼け具合など、いろいろな要因が絡み合っていると思われていますが、直接の原因はコオロギでした。双葉が出揃った頃、芽のほとんどをコオロギに食べられてしまったのです。9月17日と29日に間引きと移植、および追い播きをしましたが、結局、第一回目の播種の生き残りが20kg、三度目の播種から成長したカブが3kgという結果でした。

9月29日に間引き、移植、追い播きの作業をされた野間さんの話では、比較的によく育っていたのは、左

上の区画の約9㎡の500本のみで、残りはほぼ壊滅状態。コオロギがとにかく多くて、左上の区画の周りで30分程度、右手で捕獲して左手に持ったナイロン袋に入れていく、という作業だけで100匹くらい捕れたのだそうです。1時間ほど、同様の作業をした学生の高橋君は200匹ほどを捕獲。コオロギは、燃え残った木の枝が積んである下にたくさん隠れていて、枯草を含め、コオロギの隠れ家となるものを残すのはよくない、と実感したとのことでした。



ビニール袋にどっさり採れたコオロギ

[野間直彦氏撮影]

“飛んで火に入る夏の虫”

今年も、収穫の後、中河内の公民館で集落の方々と「交流会」をしました。プロジェクターを使って、今年の作業を写真で振り返りつつ、中河内地域を写した昔の航空写真などを映し出しながら、かつての焼畑の様子などをお聞きしました。

同じ余呉地域でも、私たちの焼畑の先生である永井邦太郎さんが暮らす摺墨と中河内とは、焼畑のやり方が微妙に異なるようです。摺墨では、午前中に火を入れた後、軽く耕し、午後には種子を播いてしまいましたが、中河内の女性の方々の話では、夕方4時頃から火を入れ、種子を播くのは次の日だったといいます。火を入れた後、焼け残った木々（地元ではコツボネと呼ばれたそうです）を集め、夕方薄暗くなった頃、焼きます。こうしてコツボネを焼くことを「コオロ焼き」と呼んだそうです。「コオロ」はこの地方の方言で「コオロギ」のこと。夕方焼くと、明るく燃える火にコオロギをはじめとする虫が飛び込んできたからだそうです。そして、翌日、種子を播いた後は、ブチキリと呼ばれる鋏でしっかりと打って、土中の木の根も取り除いていったそうです。

コオロギと焼畑の深い関係を痛感する年となりました。来年は、お盆前には火を入れ、コオロ焼きもしてみようと話しています。

亀岡フィールドステーション

清滝の潜在力を求めて その②

—ますや店主の話から—

亀岡FS 研究者 豊田知八

ますやの玄関先の帳場には「三高・一高」という旧制高等学校二校の名が入る額が掛かっている。三高側には「左京吉田・紅もゆる丘の花」、一高側には「本郷向ヶ丘・嗚呼玉杯に花受けて」とそれぞれ学校の所在地と校歌が記されているその額は、両校が対抗戦を繰り広げた証だという。明治30年(1897)日本で二番目の帝国大学・京都帝国大学が創設された頃から、大学予科として東京の一高と京都の三高は常に対比され、対抗戦を繰り広げるライバル校^[1]として競い合った。

三高生たちの常宿・清滝の「ますや」店主・森田氏は先代同様、当時を知る人物だ。「三高生の『打倒一高!』へのライバル心は、ほんまに凄かった。元々、勉学で一高に勝つ!という強い思いで入学する人ばかりなので、入学後は野球や柔道、ラクビー、バスケット、ボートなどの運動部から、文学発表や弁論部など文化部に至るまで、あらゆる部活、分野で対抗戦をしていた。皆、複数の部を掛け持ちで所属し、一つでも一高に勝とうと必死だった」と当時の三高生の、一高への対抗意識の強さを語る。「ますやでは『打倒一高!』を掲げた各倶楽部が会議や打ち上げ会など開いていた。部活への入部は本人の意思というより、出身中学校や同郷で決められるというのが普通」と新部員は同郷の先輩が半強制的に入部させたという。「ますやの宴会で対抗心を鍛えますのや『一高に勝つまでは卒業できへん!』と決意し、わざと留年して6年間、学校に残り競った筋金入りの対抗意識を見せる者もいた」。店主が「もういい加減に卒業せんと親御さんに悪いで〜」というのと「これだけは譲れん。勉強もちゃんとしているし、親もわかってきている」と親公認の熱の入れ様だった。また、柔道の団体戦で一高に勝てないと「団体では負けているけど、個人戦では一高の奴らには負けたことがない!」と負けん気の強さを見せる学生もいたという。

この対抗意識はなんと料理屋までにも及んだ。「一高は湯島『江知勝』で、三高は清滝の『ますや』と料理屋でも競争やった」。という徹底ぶり。まさに「ますや」は彼らにとって「打倒一高」のための作戦戦略本部だった。後年、若き日に競いあった両校出身者同士が

会する宴会には森田氏はゲストで招かれている^[2]。最後は皆で校歌を歌い、遠い青春の日を懐かしむ。

また、ますやに三高出身者が突然、訪ねて来ることがある。いずれも各斯界で名を馳せ、一角の成功者と呼ばれる人物^[3]だが「テレビや雑誌などでみる凛とした表情や整然とした態度とは異なり、肩を落とし、背中を丸めて宿の部屋から望む清滝の山々と清滝川の流れをいつまでも眺めている」という。清滝の山紫水明、ますやの部屋の柱や襖に板の間の廊下、きしむ階段の音まで昔のまま。「自由奔放に友と歌い語った、あの頃」と何も変わらない風景がそこにはある。何もかもあの頃のまま。夢や志を抱いた青春の一コマ、一コマが昨日のこのようにフラッシュバックしてよみがえるのだろうか。

清滝・ますやの物語には、三高生だけの話だけではなく、戦前から戦後、そして高度成長時代へとがむしゃらに前を向いて走り続けてきた全ての日本人に共通するノスタルジーが凝縮されてはいないだろうか。戦後の京都観光から取り残されたことで、変わらない自然風景が今も残る清滝。この地で暮らしてきた人とこの地で多くの思い出をつくった他所の人の記憶が、変わらない風景にお互いの絆を再びつなぎあう。どこか懐かしい記憶をつなぐ力こそ清滝の潜在力だと感じる。



ますやの帳場に掛かる三高ゆかりの額

[1] 京都三大学(岩波書店)著者:橘木俊詔 一高が武家出身者、三高は平民出身が占めていた。

[2] 同窓会報 61 清滝ますや聴聞録 梅田義孝(1961) 梅田氏は「ますやの存在はけだし三高外野席に一頭地を抜いて光っている。生き字引だ」と述べている。

[3] 後年、湯川秀樹氏、朝永振一郎氏、江崎玲於奈氏などノーベル賞受賞者や、日野原重明氏、後藤基夫氏など多くの卒業生が訪れている記録が残る。

守山フィールドステーション

フィールドとフィールドがつながるとき 3 ー丸太が守山にやってきたー

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

守山市の若手経営者が取り組む、100bench project では、10月に山から間伐材が届く予定であった。しかし、ここで一つ問題が起こった。今回、木材を提供くださる地域の山々の植林の歴史は古く、間伐材といっても良く育った良材で、提供していただく予定だった全ての木材に買い手がついてしまったのである。そのため、新たに間伐せねばならなくなった。そこで伐採後の搬出・皮むきをプロジェクトメンバーの手で行うということで、新たな木を伐採していただくことになった。ここで、大きな助っ人が現れた。守山市埋蔵文化財センター長の石田さんである。石田さんは長年、ボランティアとして「山の人の技術や知識にはどうていかなわんけど、ちょっとでも手伝えたらなと思う」と、山の間伐を手伝い、材の活用に携わってこられた。そんな石田さんが、プロジェクトの目的に賛同してくださり、今回の搬出の手助けとその後の材の保管を快諾してくださったのである。

10月7日、早朝から2tのユニック車を借りて、山に向かった。山では森林組合長さんが待っていてくださり、ものの10分で林道脇の太い木を5本伐採してくださった。さて、それからである。まず木の枝を落とす。それを4mごとに切断し、林道に出す。それをユニック車のそばまで寄せて、載せる。根元なら直径60cmはある太い木である。そのうえ直前まで水を吸い上げていたため、4mに切断しても驚くほど重い。縄をかけて、4人で引っ張ってやっと林道に出せる。車まで引き寄せ、クレーンで持ち上げてようやくトラックに載せることができる。

守山と山を2往復し、皮むきが一段落したのは夕方4時だった。昼ごはんを食べるのも忘れて、7人がかりで一日を費やした。伐採こそは、ものの10分であったが、その後の搬出の大変をみんなが痛感した。石

田さんは、「わざわざ、組合長は林道に沿った木を伐ってくれはったんや。これが山の中やったら、1日では終わってへん」と言われた。

山道をドライブしていると、間伐したまま放置されている丸太をよく目にする。もったいないな。伐ったのなら、活用すればいいのに…などと思うこともあったが、その理由がよくわかった。

当日やりきれなかった皮むきは、翌日から各自の仕事の手のあいたときに、メンバーが交互に作業しに行った。メールには、常にメンバーの誰かからの報告が入った。

保管場所は、石田さんが館長をつとめる埋蔵文化財センターの駐車場である。作業をしていると、センターで作業されている地元の方がのぞきに來られた。まだ昼ごはんを食べていないことを言うと、お菓子やコーヒーを差し入れしてくださった。メンバーの中には、センターに訪れるのが初めての方もいた。予想外の作業であったが、プロジェクトの「山と守山をつなげる、市内の人と人をつなげる」という目的にグンと近づく、価値ある経験だったと思う。

11月10日には、市内の製材所の方がプロジェクトの目的に賛同し、丸太を製材していただけることになった。これでやっと、市民と一緒にいうさまざまなワークショップやイベントを企画していくことになる。メンバーの一人がつぶやいた。「こういう活動って必要なは、お金以上に行動なんやな」。もちろん多くのことに、お金はかかっている。森林組合等を訪ねるときにもっていく、小さなお菓子。ユニック車のレンタル。ガソリン。本来なら、木材にも製材にもお金がかかる。しかしそれ以上に、誰かが町のために動き始めると、その他の誰かもまた動き始めてくれることを言いたいのだ。最初は手助けの立場であった私が、今では、このプロジェクトから学ぶことが多くなった。
(つづく)

大川フォーラム報告

12月3日土曜日、守山市今浜町的美崎自治会館で大川活用プロジェクト(美崎自治会、守山市、立命館守山高等学校、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)主催による大川フォーラムが開催されました。大川活用プロジェクトは、大川(旧野洲川南流)とその周辺地域を対象に環境保全とまちづくり活動に取り組んでいます。今回のフォーラ

ムはこれまでの活動の経過報告とともに、地域にとっての大川の価値の再発見と今後のまちづくりについて考えるよい機会になりました。当初80名の参加を予定していましたが、宮本和宏守山市長をはじめ130名を超える参加者があり、(4頁につづく)



子どもたちの発表

■ 第41回 定例研究会

1. 日時:平成23年12月27日(火)16:00~19:00
2. 場所:東南アジア研究所(京都市左京区)
3. 最終報告書草稿の発表および検討

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
担当:矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

- 第1回大川フォーラム 『「里川里湖のまちづくり」から
～住民、研究、行政の協働』 開催のお知らせ
1. 日時:平成23年12月3日(土)14:00~
 2. 場所:美崎自治会館多目的ホール(滋賀県守山市今浜町)
 3. プログラム:基調講演、事例報告、パネルディスカッションほか

問合せ 守山市役所みらい政策課 miraiseisaku@city.moriyama.lg.jp
または、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室 矢嶋 まで

地域研究における実践の意義

一 課題先行的アプローチを手がかりに

京都大学東南アジア研究所 安藤和雄

「大学院への研究案内」という副題のついた大学院への進学を目指す人々向けの『世界地域学への招待』(大阪外国語大学特定研究プロジェクトチーム、嵯峨野書院、1998)という図書がある。この本は、本の性格から、本の帯にあるように「地域研究とは何か」を知るために書かれた好著である。巻頭に、赤木攻は、日本の地域研究のルーツに言及しつつ、地域研究とは何か、地域研究が目指す問題について、“現代を切り拓く「地域研究」”(同上:11-24)という文章を寄稿している。現代のもっとも大きな学問的課題は、近代化が生み出した近代病を促進させた「近代学問体系」を根底から問い直し、近代病の蔓延の克服を目指す学問体系を新たに模索することにある。そして地域研究もその学問的課題を担っているという。また地域研究の真髄は地域との生の触れ合いであり、フィールド・ワークによって、研究対象となる地域を律している論理とでも言える「地域性」を抽出することが、地域研究の目的であると説いている。フィールド・ワークを欠いた地域研究は絵に描いた餅であり、地域研究はすぐれて現在学で課題先行的アプローチが適していると論じている。例えば、旧来の経済の理論で以ってある外国の地域を研究するのはケース・スタディであって地域研究ではなく、課題を先行させ、その課題の性格に応じた適切なアプローチを開発していくのが地域研究であると、研究のあるべき姿について言及している。十数年経過した今でも、この主張は説得力があり、私も同感する。

赤木が指摘するケース・スタディと課題先行的アプローチとの違いを検討することは実践型地域研究を考える上で大いに参考となる。ケース・スタディとは、あくまで事例である。その事例をもって、代表とされる普遍化された問題があるという前提にたつ。つまり、多くの既存学問では、あくまで、事例によって説明される論理的普遍性が重要なポイントとなる。ケースは特殊であってはならない。解決策も普遍的立場か

ら個別という地域を扱う。だから、場が限定する個別的影響は普遍化の過程の説明の中でたくみに排除される。究極的には、解決策も場に限定されていないという一般論が論理的に帰結される。こうして、いつの間にか、地域という限定された場という立場がすっかりと消え失せてしまうことになる。地域の住民でもない研究者にとっては、普遍性という説明を目的とする分析的研究が取らせる観察者の立場によって、普遍性という外からの視点から課題設定を行いやすいとも言えるだろう。しかし、フィールド・ワークによる地域研究は、地域を研究する以前に、地域で研究することから始まる。フィールド・ワークを正直に行なえば行なうほど、課題設定は、場の外からではなく、場の内から生まれる。ここに、場に物理的に立つ研究者のジレンマが生まれる。地域に暮らす人々が抱える課題が明確に認識された時、課題研究は、説明から解決へという実践の重要性を、研究者に認識させ始めるのである。

人間は誰しも「善」の感情をもつ。地域研究を既存学問と差別化するのは、場に限定された課題先行的アプローチをとることによる「善」の感情の発動であり、課題に対する実践者の自覚であると言えよう。この自覚こそが地域研究の課題設定と「発見」を実践につながったユニークなものにしていくのである。

(3頁のつづき) 「想定外」の大盛況となりました。自治会役員による活動経過、子どもたちの環境学習会の結果、守山高校バイオテック部の生徒の大川の水質検査結果など、興味深い報告でした。

パネルディスカッションでは、会場から「今日の話、家で子どもになんと話したら良いだろうか?」との質問がありました。本当に答えるのがむづかしい質問でしたが、パネルから「今日、友達や高校生のお姉さんの環境学習の発表があり、来年も同じようにやりたいとの話が出ていたから、今度、お前も一度参加してみたらどうだと、ぜひ話しかけてください」と提案されました。まちづくり活動において、子どもたち次世代につないでいくことの重要さと、そのむづかしさを改めて実感しました。(矢嶋)